

## 第4分科会

# 高大接続改革の動向から紐解く学生理解 ～「接続」の意味するもの～

報告者

**小林 浩**（リクルート進学総研所長／リクルート「カレッジマネジメント」編集長）

**大塚 雄作**（独立行政法人大学入試センター 副所長）

**荒瀬 克己**（大谷大学 文学部 教授(元京都市立堀川高等学校長)）

コーディネーター

**河原 宣子**（京都橘大学 入学部 看護学部 教授）

参加人数

**112名**

FDのコアは「学生に関心をもつこと」であると信じている。しかし、当たり前であるが、大学教職員は、入学してきた学生の過去をあまりよく知らない。入試という関門をくぐる際に、獲得した点数や面接での印象、あるいは調査書などは把握できるが、どのような勉強をしてなぜ大学を受験したのか、入学してから確認することはあっても一人一人のホンネや背景はなかなかわからない。

現在、2014年12月の中央教育審議会の「高大接続答申」に基づいて、高校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的な改革のあり方について具体的な議論が進められている。しかし、そもそも、「高大接続」の意義はどこにあり、なぜ今、この改革は一体的に行われているのだろうか？

今回の分科会では、高大接続に関係する報告者の方々に、改革の背景と方向性をご提示いただきながら、参加者の皆様と高大接続のあり方について学び、学生理解を深めるための議論ができればと考えている。



## 〈第4分科会〉

# 高大接続改革の動向から紐解く学生理解 －「接続」の意味するもの－

2016年3月7日、「大学新テスト採点で人工知能AIの導入を検討」という報道があった。その前日に、本分科会は、まさにこの話題－しかも記述式テストに関する課題について議論をしていた。本報告書が出版される頃に、どのような状況になっているかわからないが、いよいよ高大接続について本格的に動き出したのだなという印象を持った。

今回の分科会のテーマは、「高大接続改革の動向から紐解く学生理解－「接続」の意味するもの－」とし、3名の報告者から充実した内容のご講演をいただいた。

最初に、リクルート進学総研所長の小林浩氏からは「産業界からみた高大接続－社会は今、何を求めているのか」というテーマで、社会の動向や変化から高大接続を視たご報告いただいた。「なぜ、今、高大接続なのか」がとてもわかりやすく頭に入ってきた。

次に、独立行政法人大学入試センター試験・研究統括官の大塚雄作氏から、「大学と高校をつなぐ大学入学者選抜のあり方とは一大学教育の視点から」というテーマで、大学教育におけるアクティブラーニングの取り組みと課題、大学入試センター試験の実際、現在議論されている共通テストに関する課題などをご報告いただいた。「どのような学生に入学してほしいのか」という問いは「どのような卒業生を育てたいか」という問いに直結する。大学個々の自律が求められていると感じた。

最後のご報告は、「高校と大学をつなぐ大学入学者選抜のあり方とは一高校教育の視点から」というテーマで、大谷大学文学部教授・元京都市立堀川高等学校長の荒瀬克己氏から、「学力」の意味について深く掘り下げ、高校や大学で学ぶ意味とカリキュラムのあり方であった。今一度、学びの意味を再認識させられる内容であった。

これらの具体的なお報告内容については、本報告書に掲載しているので、ぜひともご覧いただきたい。いずれも、襟を正して教育を見つめ直す機会となる貴重なものである。

全体ディスカッションでは、もう少し議論の時間が取れば・・・という余韻を残し、フロアからのご質問に答えていただきながら活発に行われた。“そもそも「高大接続」の意義はどこにあり、なぜ今、この改革は一体的に行われているのだろうか？”という本分科会の命題も踏まえ、議論の要点を箇条書きで以下に記載させていただく。

- 個人と企業のマッチングは、個人の志向とそれぞれの企業がどのような人材を求めているかで決まる。就活生の意欲や資質もちろんだが、個々の企業が「どのような人材を必要としているか」を見直すべきである。
- わが国では18歳である意味キャリア選択を迫られる。主体的な学びは大学だけで培われるものではない。例えば小学校の時代から「キャリアノート」を作成するなど、「自分自身が何を学んだか」「将来どのような道を歩みたいか」を自身の言葉で表現できるような人材育成も必要かも知れない。また、高校1年生終了時点で「文系か理系か」を選択するような方法は考え直す必要があるのではないか。
- 中学、高校、大学問わず、授業のあり方も、ただ「アクティブラーニング」という形を取り入れるのではなく、「アクティブラーニング」の意味を今一度問い直し、何が必要かを考えるべきである。
- 「高大接続」を考えること＝現在の教育に課題があるということ。
- 「多面的評価」と言われているが、指示待ちの



学生、あるいは自身で切り開いていくことができない学生、自分で表現することが困難な学生……など多様化する学生においてどのように評価していくのか。学生個々の個性を尊重するために、「多面的評価」には画一的ではなく、いろいろな基軸を設けるべきである。

- これから社会を生きていく若者にいつ、どのように力をつけてもらうのか、そのことを考えることこそ、「高大接続」を問い直す意味である。「この世界を生き抜く人材を育てる」というコアは同じ。しかし、社会的背景や多様なニーズに沿った教育改革が行われるので、いろいろな課題が噴出する。では、本質はどこにあるのか、という議論こそなされなければならない。

今回の分科会でのご報告内容やディスカッションを通して、今まさに、私たちが「答えのない問いに最善解を見出す」試練に直面しているのではないかと思った。この分科会の企画段階で、自身は、“FDのコアは「学生に関心をもつこと」である”と記した。だからこそ、学生を理解するよう努めるべきで、そのためには学生が歩んできた道を理解することも重要で、だからこそ高大接続というテーマに行き着いた。分科会を終えた今でも、そ



の考えに変化はない。むしろ、やはり、学生主体で考えなければならない、それは、教育現場にいる私たちこそ「受け身」ではなく「主体性を持たねば」と認識した。

私たちは、どのような人材を育てたいのかー今後、この議論が教育現場のあちこちで行われることを願う。

本分科会にご参加いただいた皆様、サポートしてくださったスタッフの皆様、そして、「高大接続」いや「教育」の本質を熱く語ってくださった報告者の皆様に、心より感謝申し上げます。

コーディネーター 京都橘大学 河原宣子

# 産業界から見た高大接続 ～社会はいま何を求めているか～

リクルート進学総研所長／リクルート「カレッジマネジメント」編集長 小林 浩

産業界から見た高大接続  
～社会はいま何を求めているか～

2016年3月6日  
リクルート進学総研所長  
リクルート「カレッジマネジメント」編集長  
小林 浩

RECRUIT

RECRUIT

<略歴>

小林 浩

リクルート進学総研 所長  
リクルート「カレッジマネジメント」編集長

株式会社リクルート入社後、グループ統括業務を担当、「ケイコとマナブ」企画業務を経て、大学・専門学校学生募集広報などを担当。経済同友会に出身し、教育政策提言の策定にかかわる。その後、経営企画室、コーポレートコミュニケーション室、会長秘書、特別顧問政策秘書、進学カンパニー・ソリューション推進室長などを経て2007年より現職。

月刊『広報会議』にて「外から見た大学」連載（2009年～2013年）  
文部科学省「熟議に基づく政策形成の在り方に関する懇談会」委員（2009年～2011年）  
文部科学省「大学ポートレート（仮称）準備委員会」委員（2012年～2014年）  
文部科学省中央教育審議会高大接続特別部会臨時委員（2012年～2014年）  
文部科学省中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学ワーキンググループ臨時委員（2013年～2014年）  
文部科学省専修学校生への経済的支援の在り方に関する検討会委員（2014年～）  
文部科学省高大接続システム改革会議委員（2015年～）。

2

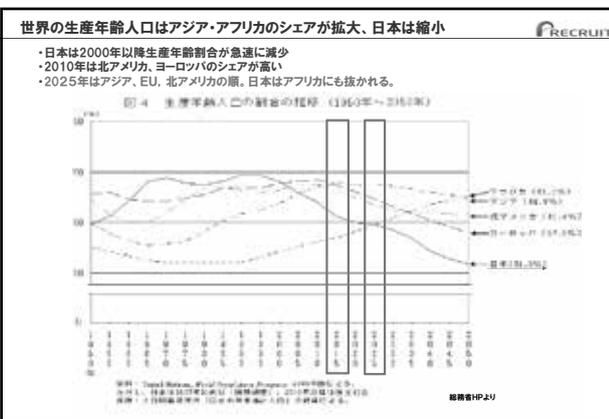
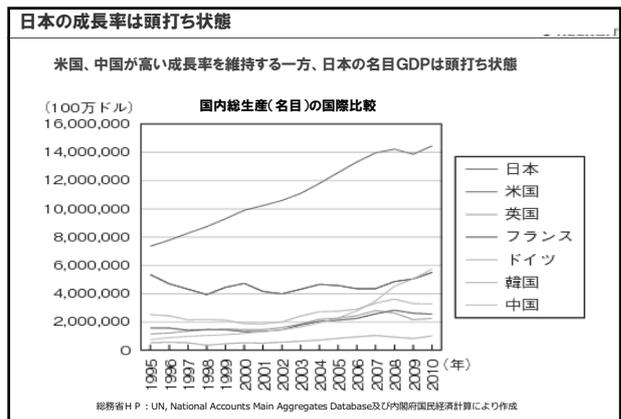
RECRUIT

1

取り巻く環境の変化

～すでに起こっている未来を想定する～

3



教育改革の背景～グローバル化とユニバーサル化の進展～

**グローバル化**

社会環境の大きな変化により、求められる人材像が変化

<従来>

- ・欧米をキャッチアップ、肩を並べるための教育
- ・人口ボーナス期における安定した労働力

均質的で、正解を早く効率的に求める力

<今後>

- ・グローバル化(多様化)により、国境を越えて人材が流動する時代
- ・人口減少期におけるイノベティブな人材

正解のない中で、主体的に取り組みチャレンジできる力

小・中・高校→入学選抜→大学の一体的改革

**ユニバーサル(大衆)化**

大学進学率上昇により、学力が下方拡大

人口減少⇨大学数は増加 = 定員割れ

大学数 70年 382校 → 90年 507校 → 14年 781校

私立大学定員割れ 15年 43.2%

量的拡大→質の確保・保証



### しかも、ライバルは外国人？

2015年卒の新卒採用活動の展望  
(従業員1000人以上の日本における日本人)

今後、グローバル化に対応が必要なのは、リーダーだけでない

日本の大学・大学院を卒業する「外国人留学生」 42.9%

海外の大学・大学院を卒業する「外国人学生」 22.0%

外国人採用意向のある日本企業

就職みらい研究所 就職白書2014

### 学生が将来を考えるうえで影響を受けたのは何か

・理系学生は「専門分野の勉強・研究」「ゼミ・研究室」「大学教員との関わり」  
・文系学生は「友人」「アルバイト」

大学の授業や先生と影響が薄い文系学生

将来の仕事やキャリアを考える上で影響を受けた経験

項目	全体	文系	理系	
分科大学・総合大学・院の専門	731	61.6	27.4	26.7
キャリア教育の講座	26.7	26.1	46.0	41.3
インターンシップ	28.0	22.7	49.8	49.8
部活・サークルの活動	22.7	22.7	22.7	22.7
ゼミ・研究室の仲間	42.1	34.3	21.4	60.7
大学・大学院の教員との関わり	24.0	24.0	24.0	24.0
友人との関わり	58.8	60.7	50.1	50.1
アルバイト	50.1	50.1	50.1	50.1

※大コスは、5段階尺度のうち、「とてもなる」「なるかな」というとあてはまる」の合計値  
※n=30未満は参考値

### 企業の期待と大学教育のGAPはどこにあるのか

「実社会とのつながりを意識した」課題を「チームで取り組む経験」が求められている！  
⇒アクティブラーニング、プロジェクト学習等の取り組みが期待されている

文系系、技術/理科系大学生に期待するもの（複数回答）

座学だけでなく、実社会で活用できる力（大学教育の質的転換）

15

### 就職しても、一企業で勤め上げるのは少数派に

企業を取り巻く環境も激変  
・グローバル化  
・IT化  
・技術革新

会社の寿命って、いったい何年くらいでしょうか？

Question

① 9年 ② 18年 ③ 30年 ④ 42年

1983年

自分のキャリアを自分で考える力が必要に

「企業の短命化」

人間の就業期間 > 企業の寿命

『日経ビジネス2013年11月4日号』特集「会社の寿命」  
売上と経費費率ランキングの上位企業を「実業」を営んでいる企業と見出し、その平均的な就業期間を計算（1983年、就職後は就職継続をベースに計算）

### 変化の激しい社会のなかで求められる資質

**これまでの社会**

工業化社会  
知識・技能の「習得」と「再生」  
【情報処理力】  
価値の持続継承  
一つの正解  
1人のリーダーとフォロワー  
画一化・同質化した社会にキャリアを合わせる

**これからの社会**

知識基盤社会  
知識・技能の「活用」  
【情報編集力】  
新しい価値の創造  
複数の納得解  
各場所でリーダーシップを発揮  
個を軸に環境を選んでキャリアを切り拓く

変化が激しい、予測できない社会において、必要とされる知識・能力は？  
**生涯「学び続けられる人」の育成**

### “学ぶ”と“働く”を繋ぐポイントは何か

企業は大学の教育と評価を基本的に信用していない！

⇒新卒採用で成績を問わない  
⇒大学の学問と仕事ができるかは別物という認識（社会と切り離された「座学」をイメージ）  
⇒学生は大学で何を学んできたかを語らない（特に文系、就職のときだけ増える「副部長」と「副店長」）  
⇒大学で何を学び、どんな経験を経て、何ができるようになったのが見えづらい  
⇒結果的に入口のスクリーニングになってしまっていないか

特色ある大学の人材育成を評価する動きも  
例えば - グローバル人材の育成  
- 大学の産学連携を評価  
- 地元で圧倒的に強い理大や女子大

高校から大学へ受け身の進路選択  
例えば  
・高校1年生のうち文系・理系選択（ネガティブフリーニング）  
・私立大学入学者の過半数はAOや推薦といった非学力型入試（指定校一貫の中で上位の大学選択）  
・浪人を回避して「行きたい大学より、行ける大学」へ

“学ぶ”と“働く”を繋ぐポイント

受動的な学生を大学4年間でいかに主体的、能動的な学生に変えていくか

入学した学生を徹底的に鍛えて、主体的な学びを引き出すことが重要

3

## 大学に求められているものは

～個性輝く大学づくりに向けて～

19

### 大学の特色を活かし、入り口と出口を理念で一貫させる経営

こんな人材を育てたいという創業者の強い想い (学校のDNA)

ミッション・ビジョンの明確化!

入口(入学)⇒中身(教育・研究)⇒出口(就職)まで  
一貫した経営、教育マネジメントが重要

IR (Institutional Research) による検証

20

### 今大学に求められているものは

世界的な傾向として、アウトカム(学習成果)重視は避けられない  
OECD PISA...15歳の到達度、OECD AHELO...大学卒業時の到達度  
日本でも高等学校基礎学力テスト導入、国際バカロレア(IB)認定校の増加etc.

「入学の国」から「卒業の国」実現に向けての大きなプロセスの中にある

大学生活で

「どのような経験を経て(経歴価値:正課+正課外)」

「学生・生徒が何ができるようになって(ラーニングアウトカム)」

「それが客観的に説明できるか(客観評価)」

各大学の理念・ミッションに基づいた、その学校らしい、その学校ならではの**人材<独自性・個性>**を、育成することが重要

学校を卒業すると、何が出来るようになるのか、どんな人材を社会に送り出すのか

<ディプロマ・ポリシー>

教育研究活動を通じて、学校がどのような人材育成をするのかのコミットメントはあるか。

そのためには、どんな志向や意欲を持った学生に来てほしいのか、どのような要件(学力、意欲、活動実績等)が必要なのか(カレッジ・レディネス)

<アドミッション・ポリシー>

21

### ユニバーサル化時代の人材育成の方向性

正解のない時代へチャレンジできる人材の育成!

何を教えたか(input重視)⇒何を学んだか、できるようになったか(outcomes重視)

全体の底上げ

受動的な学生を主体的・能動的な学生に変革する仕組み

リーダーの育成

語学力 × 教養教育・リベラルアーツ

<キャリア・スタンスの醸成>

- ・若年時から、社会・企業の理解促進
- ・働くことの意味を考える

<就業力の育成>

【学び方・カリキュラム改革(教育力の向上)】

- ・初年次教育
- ・アクティブ・ラーニング(FBLなど)
- ・企業・地域、業界との連携
- ・卒業生の協力、活用 etc.

<到達目標の明示>

- ・社会人基礎力
- ・資格取得等(専門種上) 専修制の評価
- ・TOEIC/オーストラリアン・カレッジ・アワードの育成
- ・GPAの厳格化(評価基準も含め) etc.

<グローバル化への対応>

- ・留学義務化
- ・GPAの厳格運用
- ・国際認証
- ・カリキュラムのナンバリング
- ・異文化理解、異文化体験 etc.

<少教精説>

- ・選抜コースの設置
- ・教内留学
- ・履修状況等との連動
- ・外国人とこっぴど選抜になった教育 etc.

ローカル人材 ⇒ ナショナル人材 ⇒ グローバル人材

正課・正課外を含め、大学全体で大学のミッションに合った人材を育成

4

## 高校・大学を通じて求められるもの

～問われるのは学習成果(インプットからアウトカムへ)～

21

### これからの社会で求められる「確かな学力」

学力的3要素

- ① 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
- ③ 主体的に学習する態度

(学校教育法 第30条第2項)

今回の答申では、社会で自立して活動していくために必要な力という観点で捉え直す

学力的3要素  
からなる  
確かな学力

- ① これからの時代に社会で生きていくために必要な、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度(主体性・多様性・協働性)」を養うこと
- ② その基盤となる「知識・技能を活用して、自ら課題を発見しその解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力」を育むこと。
- ③ さらにその基礎となる「知識・技能」を習得させること。

中教審答申「新しい時代につながる幅広い高大接続の実現に向けた高等教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」より抜粋





7

### ◆グループ討論導入(2006.5.23)

8

### ◆学生のグループ討論肯定的感想

このようなグループ・ディスカッションの機会は今まであまりなかったので**新鮮であったと同時に、参加する皆が真剣に一つの課題に関して取り組んでいた**ので、とても有意義であったと思う。自分一人では思いもよらないような意見が出て、またそれに対して自分が考えていることを補足していくと、かなり深い討論ができたと思うので、このような少人数の**グループディスカッションの醍醐味を味わえた**ような気がする。……

9

### 【実践例】

京都大学2006年度前期『教育評価の基礎Ⅰ』  
評定平均値の推移

②おとなしいがすぐ寝る新入学生 →

③たまたま パワーポイント導入  
but 寝る学生は寝る →

⑥思いつきで入れてみたグループ討論 →

理解度が低くなってきている!

10

### ◆学生のグループ討論否定的感想

■ ……それにしても**90分で概要を説明し討論し発表するのは無茶だ**と思いました(提起しておいて何ですが)。……**2週間ほど時間をとって**しっかり議題を煮つめてからでない**と到底有意義なディスカッションにはならない**……

■ 今回は各グループともに**論点が絞れていない**ように感じた。それゆえに**バラバラな提案**になってしまったように思う。今回ならばこの議案をもとに「評価は相対的 or 絶対的のどちらであるべきか」と限定した方が面白かったと思う。……

11

### ◆大学の学びに求められる創発もの

□ **Unlearn 学びのほどこ直し**  
一度学んだ知識をほどこ直し、つなぎ替える  
ex. *paper or plastic?* …… それぞれの単語は知っているが…  
自分自身の枠を超えて知を再構造化・創造する  
・ 基礎となる知識をベースに体験を広げていく  
・ 人と人との「つなぎ」を広げていく …… 絆

□ **創発的な活動**  
個の自由な動きの中で **個の交流**が起こり  
それに基づいて新たな**product**が形成される  
→ 学習共同体 **learning community**

### ◆学習共同体形成のための要件

ex. 指揮者のいない室内管弦楽団——オルフェウス室内管弦楽団  
Cf. 金子郁容『新版・コミュニティ・ソリューション——ボランティアな問題解決に向けて』岩波書店

◇共有できるコミュニケーションの「**ツール**」 = 音楽

◇自然に形作られる「**ルール**」  
多くの楽員は他楽団・大学などかけもち  
→ **35%**の練習に参加すること

◇一人一人が自発的に受け持ち  
互いに認め合う役割をもつ「**ロール**」

◇相互に編集しあい共有している場  
→ ソーシャル・キャピタル「**ゴール**」

★入試は、大学コミュニティへの参加者の選別と捉えられる  
「**ツール**」=「**基礎**」は **コミュニティ参画** に必須の要件!

## ●センター試験が果たす役割

13

- **難問奇問を排除した、良質な問題の確保**
  - 問題作成 = 第1委員会 ← 問題作成OB委員会によるチェック  
+ 高校教育関係者等を中心とする点検協力者によるチェック
  - 試験実施後の試験問題評価委員会による評価  
http://www.dnc.ac.jp/data/hyouka.html
  - 問題公開による各方面からの問題照会
- **個別試験との組合せによる入試の個性化・多様化**
  - 小論文・面接 推薦入試・AO入試  
帰国子女・社会人対象特別入試 etc.
- **配慮を要する受験生への対応** (平成28年度許可者数：2,559人)
  - 拡大文字問題冊子 (14冊・22冊) 点字問題冊子
  - 点字解答 (1.5倍延長) 文字・チェック・代筆解答 (1.3倍延長)

## ●高校・入試・大学の接続

14

- **大学教員の手による問題作成**
  - **大学教員が**  
高校の学習指導要領に準拠して 教科書なども精査して  
大学の視点から 問題作成 = 受験生への一つのメッセージ
  - **高校→入試→大学の高大接続の一体的流れの確保**  
大学教員が 高校教育に触れる場  
高校教員と大学教員との対話の場
- **問題公開による教育利用**  
高校教育の教材として  
大学の初年次教育の教材としての利用

## ●センター試験の課題

15

- **「センター試験が諸悪の根源 知識しか測っていない」という言説** マークシート方式に対する根強い偏見  
選択肢からの逆方向の思考? 当てずっぽうでも当たる!  
→ 「尺度」の測定値を得るという考え方の欠如?  
→ 思考力等は測定していないのか?
- **大量の受験生・多様な教育ニーズに応じて複雑化**  
平成27年度試験：6教科 41科目 (新旧両課程対応)  
→ 教科・科目等をどう整理するか?
- **受験者層の変化・多様化**  
**成績未利用者の存在** (平成27年度 = 約2割強)  
→ 広範囲の難易度の試験をどう実現するか?

## ●新テストに求められていること

16

1. 思考力・判断力・表現力 (学力の3要素) の測定
2. 大学入学希望者対象 (社会人等を含む)
3. 「教科型」+「合教科・科目型」「総合型」(→新科目)
4. 広範囲の難易度 (選抜性の高い大学が入学選抜に活用)
5. 段階別表示による成績提供
6. 記述式の導入
7. 年複数回実施
8. CBT方式での実施前提の開発
9. 英語の4技能の総合的評価
10. 民間の資格・検定試験の活用

## ●学校教育法に見る「学力」の捉え方

17

- **学力の3要素**
    - **知識・技能**
      - 基礎的・基本的な知識・技能の習得
    - **思考力・判断力・表現力**
      - 知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な能力
    - **主体性・多様性・協働性**
      - 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度
- Cf. 学校教育法**  
第4章 小学校 第30条第2項「…生涯にわたり学習する基礎が培われるよう、**基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力**を幅広く、**主体的に学習に取り組む態度を養うこと**に、特に意を用いなければならない。」とあり、これは、中学校、および、高等学校に準用すると規定されている。

## ●センター試験問題作成の基本方針

18

- 高等学校学習指導要領に準拠し、**学習指導要領解説及び教科書に基づく**
- 基礎的事項の理解の程度を見るほか、**思考力や応用力を見る問題を出題**
- どの教科書によって学んだかによって**不公平が生じないように配慮**
- 思想、信条、宗教、民族及び性等に関する内容、社会的に問題とされやすい内容の取扱いについては、**教育的に公平であることに留意**
- 公表正解選択肢のほかに正解となることがないように注意 (**正解の一意性**)
- **各科目の平均点は60点程度を目標**
- 極端な**難問は回避**
- 試験問題数が**試験時間に適切な分量となるように配慮**  
→ 「良問」は、個々の問題について**独立で評価できるものではなく**、それを含み構成されたテスト全体が、以上のような観点から、総合的に評価されるべき



## ●五神東大総長の意見

(2016.2.17高大接続システム改革会議参考意見)

25

- 記述式試験は、**大学と受験生との**出題、解答、採点を通じた「対話」であるということ強調したい。その対話を成り立たせるためには、作問者には解答者の学力を的確に測れる問題の作成能力が求められ、採点者には解答の論理を読み込み、解答者の学力を測る能力が必要である。これらの能力の育成には、大学教員といえども一朝一夕にはいかないということを実感している。入学試験という場面において、公平性と公正性を担保することの重要性は論を俟たない。その中で**記述式試験の機能を発揮させるためには、作問、採点において十分な能力を有する教員を一定数確保することが必要であり、受験者が9千名弱の東京大学の2次試験の実施においても、研究所を含む全学すべての部局の協力によって何とか確保している状況である。**
- 50万人以上を対象とする規模の選抜試験において、記述式問題の特長を活かして「出題者と解答者の対話を実現すること」と「公平性と公正性を担保すること」を両立させることは、過去に世界でも例のない難題であり、大変野心的な社会実験となることを良く理解しておかねばならない。成功させるためには、**十分な人的・財政的資源を国民の広い理解のもとで準備することが必須の前提となる。**日本の教育システム全体への不可逆な影響を与えるものとなるので、未来への確実な投資につながるための周到な用意が必要である。既にC・B・Tの導入も視野に入れた議論がなされているが、出題採点の新しい手法およびそれを大規模に実施するためには、新技術とシステム開発が必要である。試験技法やJ・C・T技術の専門家を含めた、十分な議論の上で進めることを強く希望する。

## ●記述式試験の妥当性

26

### □条件付き記述式の大学入試における課題

- 採点の明確化のための条件設定
    - 採点観点の単純化により
      - 測定しようとする力からずれる可能性
      - = 測定の**妥当性**の問題
  - 解答者のレベルによって異なる思考プロセス
    - = 出題者が求めているレベルで解答してはくれない
    - 学力層によって **妥当性は異なってくる**
- Cf. 選択肢には識別を求める内容を盛り込み得る

第4分科会

●全国学力調査における条件付き記述式問題と解答例

https://www.nier.go.jp/13chousa/pdf/13mondai\_shou\_kokugo\_b.pdf

「まどめ」の文章を、80～100字で、現在の打ち上げ花火の工夫、自分で考えたことを含めてまとめる

【リーフレットの表紙】

打ち上げ花火の伝統

打ち上げ花火は、いつからか人の目を惹きつけてきたのでしょう。また、花火師たちはどのような種類の打ち上げ花火を作り出してきたのでしょうか。

そして、打ち上げ花火の伝統を守るために花火師たちはどのような苦闘をしているのでしょうか。

6年1組 今村 西村  
野田 山下

解答例

問題番号	条件1	条件2	条件3	条件4	条件5
1	<input type="checkbox"/>				
2	<input type="checkbox"/>				
3	<input type="checkbox"/>				
4	<input type="checkbox"/>				
5	<input type="checkbox"/>				
6	<input type="checkbox"/>				
7	<input type="checkbox"/>				
8	<input type="checkbox"/>				
9	<input type="checkbox"/>				
10	<input type="checkbox"/>				

28

●条件付き記述式問題の正答例と誤答例

https://www.nier.go.jp/13chousa/pdf/13setourei\_shou\_kokugo.pdf

【編集委員の野田さんと山下さんの意見】

【1879「明治12」年ご】

海防に必要不可欠なものが輸入されるようになったことにより、さまざまな色が出たことにより、打ち上げ花火の色が明るくなった。

わたしは、

大の好きを

打ち上げ花火は、およそ400年もの歴史をもった、日本のすばらしい伝統といえます。

現在では、水色やピンク色などの中間色も使ったカラフルな花火を作ったり、音楽に合わせて打ち上げたりしています。色や打ち上げにも工夫が加えられ、打ち上げ花火は今も進化していると思います。(93文字)

→ 「型物」、「色」、「音楽」、「自分の考案」、「字数」などの観点で評定することとされているが、この解答は、「型物」について触れていないので誤答とされている。

正答率 17.9%  
無回答率 20.3%

## ●「思考」の個人差

30

### □手続的知識 vs. 概念的知識

- 手続的知識の表現 ← production system
- If A then B  
If B then C ... etc.
- 手続的知識の連鎖を一つの思考プロセスと捉えることができる
- 手続的知識は自動化する → If A then C
- = 手続的知識の連鎖が知識化し構造化していく → 個人差の源泉

### □解答表現に関わる個人差 (記述式における無回答問題)

- ある個人にとっての思考が 別の個人にとっては手続き、また、ある個人にとって思考する問題が 別の個人にとっては思考を放棄する問題 といったことがあり得る。
- ex. 「1 + 1 = 2」は知識 何故そうなるのと考え出すと???

【国立公立学校全体のスコア分布】

<読むこと>				<聞くこと>				<読むこと>				<話すこと>			
CEFR	得点	Reading	割合	CEFR	得点	Listening	割合	CEFR	得点	Reading	割合	CEFR	得点	Speaking	割合
B2	200	17	8.5%	B2	200	17	8.5%	B2	148	12	8.1%	B2	147	12	8.2%
B1	150	14	9.3%	B1	150	14	9.3%	B1	120	11	9.2%	B1	119	11	9.2%
A2	100	11	11.0%	A2	100	11	11.0%	A2	80	9	11.3%	A2	79	9	11.3%
A1	50	8	16.0%	A1	50	8	16.0%	A1	30	6	20.0%	A1	29	6	20.7%

writingの場合、0点（主に無回答者）が3割弱存在。  
speakingにおいても0点が13%強。

英語教育改善のための英語力調査事業報告書

### ●対象とする受験者層をどう定めるか？

32

▶ 広範囲の学力レベルを一つの試験の対象とする困難性  
限られた試験時間の中で出題できる範囲も限られる  
→ 適応型テスト (adaptive testing) の可能性は？  
学力は内容領域のバランス（内容的妥当性）が問題とされ、それに関わる思考力等の複雑な特性も一次元的な能力を仮定することは難しい → IRT（項目反応理論：Item Response Theory）は適用可能ではあるが、かなり強引な近似となる。また、多次元全体の適応型テストのシステムを構築するにはそれなりの時間、コスト、労力を要すると共に、必ずしも試験時間の節約にはつながらない可能性が大きい。

また、記述式も、選抜に活用するためには、受験者層によって採点基準を変える等の必要があり、広範囲の学力レベルをカバーするのは困難と言える。

▶ 個別試験等も含めて一つひとつの試験の役割分担を明確に規定していくことが肝要 = 一つの入試改革

### ●CBTをどう導入していくか？

33

- CBT (Computer Based Testing) の可能性
  - ▶ 受験生の入出力媒体のデジタル化は必至
  - ▶ コンピュータのマルチメディア特性を活かしたオーセンティック（現実場面に近い）な出題
  - ▶ 記述型・パフォーマンス型の出力のハンドリングが容易  
→ 自動採点システム等の導入の可能性（回答データベースcorpus構築の要）
- CBT導入の問題点
  - ▶ CBTへの慣れの個人差（adaptationの問題）
  - ▶ 機械系導入時のリスク  
Cf. リスニングのICプレーヤーの不具合申し出件数 0.1%弱 = 500件弱  
内、機械に不具合が認められなかった件数 8割強  
→ より精巧なコンピュータの場合 不具合申し出件数は格段に多くなる可能性
  - ▶ セキュリティの課題（ex. タブレットの保管・維持・etc.）

★ 「調査」として試行実施するなど 選抜利用に向けて 段階的導入を図る

### ●共通テストの軽量化と役割分担

34

- 目的を単純化する 本来、目的によって適切な試験方法は異なる  
選抜目的（総括的評価） vs. 指導目的（形成的評価）
- 対象となる受験者層をある程度絞り込む体制作り  
ターゲットとなる受験者層において  
識別力・テスト情報量の高い試験の構成（複数レベル）を目指す
- 対象となる特性を限定する  
多次元的測定を目指す場合には  
それぞれを別の測定ツールに分割する
- コストとリスクをできる限り縮減する  
現行のセンター試験は国からの運営費交付金はゼロでやれている  
= 受験料だけで運営できている  
→ CBT、記述式採点などは 現段階では  
共通テストの場合 大きなコストとリスクが想定される

### ●入試改革に関わるいくつかの留意点

35

- 「いちばん大切なことは評価してはならない」  
板倉聖宣『教育評価論』仮説社（2003）  
教育において他者が他者を評価すべき能力の範囲は限られる
- 育成すべき力 と 選抜すべき力 の区別  
目標とすべき力は教育において育成すべき力 ≠ 選抜すべき力
- 形成的評価 と 総括的評価 の区別  
教育において必要とされる形成的評価のための手法 と  
選抜の際に総括的評価として必要とされる手法 は異なる！
- 調査 と 選抜試験 の区別  
集団の特徴を知るための調査と 個人差を明確にする試験  
集団の統計量の意味と誤差 vs. 個人の得点の意味と誤差
- 波及効果 (washback effect) の把握



高校と大学をつなぐ大学入学選抜のあり方とは  
……高校教育の視点から

大谷大学 文学部 教授 (元京都市立堀川高等学校長) 荒瀬 克己

高校と大学をつなぐ  
大学入学選抜のあり方とは  
……高校教育の視点から

2016年3月6日 大谷大学 荒瀬克己

学習指導要領の改訂

成長のしかけとしての  
教育活動のデザイン

2014年11月20日諮問理由から  
■高等学校について  
中央教育審議会における高大接続改革に関する議論や、これまでの関連する答申等も踏まえつつ、例えば以下のような課題についてどのように改善を図るべきか。

○今後、国民投票の投票権年齢が満18歳以上となることや、選挙権年齢についても同様の引下げが検討されるなど、満18歳をもって「大人」として扱おうとする議論がなされていることも踏まえ、国家及び社会の責任ある形成者となるための教養と行動規範や、

主体的に社会に参画し自立して社会生活を営むために必要な力を、実践的に身に付けるための新たな科目等の在り方

○日本史の必修化の扱いなど地理歴史科の見直しの在り方

○より高度な思考力・判断力・表現力等を育成するための新たな教科・科目の在り方

○より探究的な学習活動を重視する視点からの「総合的な学習の時間」の改善の在り方

○社会的要請を踏まえた専門学科のカリキュラムの在り方など、職業教育の充実の在り方

○義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための教科・科目等の在り方

定義は共有されているか……

キャリア教育

学力

アクティブ・ラーニング

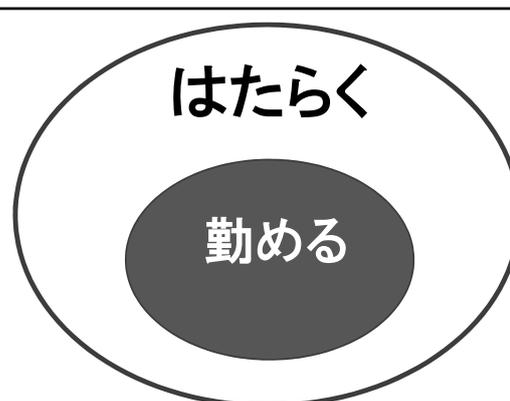
8

キャリア:人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分との関係を見いだしていく連なりや積み重ね

キャリア教育:一人一人の社会的・職業的自立に向けて、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

2011(平成23)年1月中教審答申

「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」



渡辺三枝子筑波大学名誉教授(作図:荒瀬)

在り方生き方(かつて文部省)

ライフスタイル (lifestyle)

生活の様式・営み方。

また、人生観・価値観・習慣などを含めた個人の生き方。

(デジタル大辞泉)

11

選挙権年齢、18歳に

2015年6月17日、参議院で改正公職選挙法成立

2016年夏、参議院議員選挙「自分をたいせつにする」

# 学 力

13

高大接続システム改革会議

「中間まとめ」 2015.09.15

I「中間まとめ」の背景と目的

知識の量だけでなく、混沌とした状況の中に自ら問題を発見し、他者と協力して解決していくための資質や能力を育む教育が、急速に重視されつつある。

14

- (1)十分な知識・技能
- (2)それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力
- (3)これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

15

生涯にわたり学習する  
基盤が培われるよう

……基礎基本、活用力、  
学習意欲

学力の重要な三要素

＜学校教育法30条2項＞

- ①基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、
- ②これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、
- ③主体的に学習に取り組む態度を養う

教育課程企画特別部会

「論点整理」(2015年8月26日)

から

18

### 育成すべき資質・能力の要素(OECD)

- 知識に関するもの
- スキルに関するもの
- 情意(人間性や関心・意欲・態度など)に関するもの

学校教育法第30条第2項が定める学校教育において重視すべき三要素

- 「知識・技能」
- 「思考力・判断力・表現力等」
- 「主体的に学習に取り組む態度」

19

### 三つの柱

- ①「何を知っているか、何ができるか(個別の知識・技能)」
- ②「知っていること・できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力等)」
- ③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(人間性や学びに向かう力等)」

20

問題を発見し、問題を定義し、解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、プロセスを振り返って次の問題発見・解決につなげていくこと(問題発見・解決)

情報を他者と共有しながら、考え方の共通点や相違点を理解し、相手の考えに共感したり多様な考えを統合したりして、協力しながら問題を解決していくこと(協働的問題解決)

21

### ③人間性や学びに向かう力等

方向性を決定付ける情意や態度等に関わるもの。

主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する能力、多様性を尊重する態度と互いの良さを生かして協働する力、持続可能な社会作りに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなど。

22

## アクティブ・ラーニング

2012(平成24)年8月中教審答申  
「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」用語集

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。

発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」用語集 2012(平成24年)8月

教育課程企画特別部会  
「論点整理(案)たたき台」から  
(2015年8月26日の確定版とは異なる)

このように、次期改訂が目指す育成すべき資質・能力を育むためには、学びの量とともに、質や深まりが重要であり、子供たちが「どのように学ぶか」についても光を当てる必要があるとの認識のもと、「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び(いわゆる「アクティブ・ラーニング」)」について議論を重ねてきた。

○ 昨年11月の諮問(「知識・技能を定着させる上でも、また、子供たちの学習意欲を高める上でも効果的である」)以降、学習指導要領等の改訂に関する議論において「アクティブ・ラーニング」といった指導方法を焦点の一つとすることについては、育成すべき資質・能力を総合的に育むという意義を踏まえた積極的な取組が広がる上で重要との指摘がある一方で、

指導法を一定の型にはめ、教育の質の改善のための取組が単なる手法や手練手管に終始するのではないかと、いった懸念なども示されているところである。

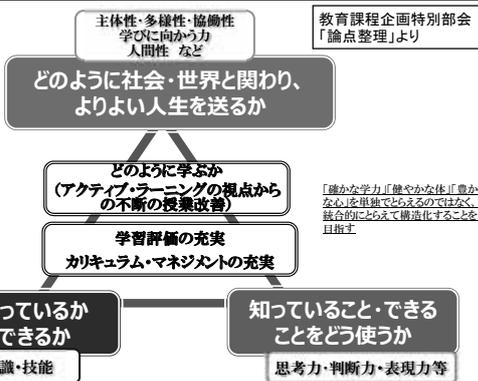
○ 変化を見通せないこれからの時代において、新しい社会の在り方を自ら創造することができる資質・能力を子供たちに育むためには、教員自身が習得・活用・探究といった学習過程全体を見渡し、個々の内容事項を指導することによって育まれる思考力や判断力、表現力等を自覚的に認識しながら、子供たちの変化等を踏まえつつ自ら学習・指導方法を不断に見直し、改善していくことが求められる。



子供の学びに向かう力を刺激するためには、実社会や実生活に関わる主題に関する学習を積極的に取り入れていくことや、前回改訂で重視された「体験活動」の充実を図ることも引き続き重要である。

○ なお、こうした質の高い深い学びを目指す中で、教員の役割は、教えずに子供たちの活動を単に見守り、支援に徹することではない。必要な知識・技能はしっかりと教授しながら、それに加えて、子供たちの発言を促したり、気付いていない視点を提示したりするなど、学びに必要な指導や環境を積極的に設定していくことが求められる。

### 育成すべき資質・能力の三つの柱



### アクティブ・ラーニングの視点からの不断の授業改善

- ① 習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置きつつ、深い学びの過程が実現できているかどうか。
- ② 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。
- ③ 子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。

### カリキュラム・マネジメント 「カリキュラム」とは何か？

学校の指導のもとに、実際に児童・生徒が持つところの教育的な諸経験、または諸活動の全体(1951年学習指導要領試案)

### カリキュラム・マネジメント

学校の教育目標の実現に向けて、子どもや地域の実態を踏まえ、教育課程(カリキュラム)を編成・実施・評価し、改善を図る一連のサイクルを計画的・組織的に推進していくこと。(学校経営の中核)

## カリキュラム・マネジメントの3つの側面

- ①教育内容を教科相互の関係でとらえる(教科横断的に)
- ②PDCAサイクルの確立
- ③教育内容・授業方法と諸条件の整備・活用をつなぐ

43

カリキュラムがどのように実施され、何がどのように学ばれたか。

どのような力を付けるために、どのような教育活動が必要か。そのための条件整備は、どうするか。

44

現状を把握する  
目標を立てる  
計画する  
やってみる  
検証する  
工夫する・続ける

これらを踏まえてどうあるべきか

高等学校基礎学力テスト  
大学入学希望者学力評価テスト  
(いずれも仮称)

